
嘘つき世界と二人と絵本

武知美海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つき世界と二人と絵本

【NZコード】

N7514Y

【作者名】

武知美海

【あらすじ】

世界を嘘でできた絵本だと称する、妹の形見である絵本を大切にしている少年、泉。

世界の嘘は幸せであり、その幸せに隠された嘘を隠すために、人は幸せを使うのだと。

そんな泉の持論に、ひとつ書き足した傷だらけの少女、イギリスのクオーターであり、隣に住むエリー。

不器用な少年と、積極的な少女の物語。
絵本のような嘘だらけの世界の中では、本当の幸せを見つける物語。

エリーのペース（前書き）

これは恋愛小説です。

時々、ギャグテイストだったり、残酷な描写があり得るかも知れませんので、そういう描写が苦手な方は、止むことをお勧めしません。

エリーのペース

僕は絵本が大好きだった。

メルヘンで、夢があつて、それでいて、いつだつて僕たちを楽しませてくれた。

僕には妹がいた。

僕より二つ年下で、幼かつた僕たちはいつも二人で絵本の世界に入り込んで、そのメルヘンな世界に夢を馳せていました。

でも。

そんな幸せな世界は、呆気なく、破れ去った。

まるで、ハサミで切り取られるよう。まるで、水でふやけた藁半紙のように。

妹は、あっけなく、僕の前から消えていった。

手からこぼれ落ちる真砂のごとく、さらさらと、風に舞うよう。

絵本の世界はすばらしい。

だつて、嘘でできているのだから。

そんな嘘が、大好きだった僕は絵本を抱いて泣いた。もう、可愛かつた妹と絵本を読むことは叶わない。

そのときの僕にはどうして妹が死んでしまったのかなんて、分からなかつた。

いや、聞かされなかつたのだ。

そのときの僕はまだ六歳。

まさか、妹が【殺された】だなんて、言われても理解なんて出来ないだろうから。

けど、今は違う。あれからすでに十一年が経過して、僕は十七歳になり、『ごくごく普通の高校生として生活している。

妹が実は殺されていて、犯人は捕まって今は刑務所だとも、親からは聞かされた。

僕の思い描いていたモノローグでは、さぞかし犯人が憎いだろうと、感じるのかもわからないけれど、それは違う。結局は、この世にある幸せなんてものは、全て絵本と同じなのだと、思い知らされただけだから。

そう。

全ては優しく彩られた、【嘘】という絵本の世界。そう考えれば合点がいくというものだ。

だから僕たちは有り合わせの幸せをやりくりして、今ある幸せに隠れている嘘を隠すのだ。

それはいつか破綻すると、本能的にわかつていても、理性をもち、文明的な生活に悦を覚えた人間にはそれから逃れる術は、ない。それは僕自信もご多分に漏れることなく、きっちりとパーティとして収まっているのだ。

だからと言つてなんだというのか。

そういうわざを得ないくらいに、この考え方たは破綻して、破綻し尽くされている。

だって、僕は妹が殺されていたと知つても、結局は有り合わせの幸せで幸福なのだから。

誰しもがそつとは思わないけれど、少なくとも、僕自身はそういうのだと、自信をもって言える。

仕方ないことだらう。

人の記憶とは薄れていくものであり、妹がいたという事実はすでに十一年前のことでの、僕にとっては過去。

過去とはすなわち、過ぎ去った時間。

あるいは。

なかつたこと。

なぜなかつたことになるのか。

なにせ、記憶は薄れるのだから、どうしたって子供の頃とは違う僕にしてみれば、妹がいて、その妹が殺されたからといって、それを憤慨するまでの記憶は持ち合わせていないのだから。

薄情な人間だと、個人でも納得に足る冷血ぶりだろう。
けど、漫画や小説なんかで見かける復讐を、当時四歳だった妹が願うのだろうか。

靈魂の存在を認めるとしても、だ。

死んだそのときには人の時間は停止するのだから、そんなこと望むだけの知識があるのか。

いや、無かつたとしても、恨み辛みはあるだろうが。
けど、僕は復讐をするつもりはない。
だって、意味ないから。

犯人は捕まつて服役中。

裁判だつて余罪もあつて加重刑だつて聞いた。
だつたら、それが裁きだ。

僕が介入することじやない。

けど……ひとつだけ。

ひとつだけ、妹が僕に残してくれたものがある。

絵本だ。

嘘で構成された、メルヘンで、キレイで、すばらしい世界。

僕の大好きだつた世界。

今は、やはり年が年だからなのだろうか、絵本を読もうとは思わなくなつた。

ただ一人、ある少女を除いて。

その少女は、日本人なのだけれど、異人の血を受け継いでいる銀髪の長髪を風になびかせた、長身瘦躯で眉目秀麗な典型的な美少女。性格は人懐こく、感情表現はとても豊かだけれど、時々感情が暴走して泣くこともある。

そして、若干だけれど妄想癖があり、何かの拍子にスイッチが入る。名前はエリー＝羽犬塚＝グッドマン。

僕のクラスメイトで、中学一年生の頃からのお隣さんでもある。

彼女は僕の絵本が好きだ。

よく僕に絵本の読み聞かせをせがんでくる。

そこまではまだいい。

ただ、最近では僕に絵本を【作れ】と要求してきている。
そんなむちやくちゃんと思つ。

何しろ、僕には絵心がない。

もし猫なんかを描こうものなら、牛と言われる始末だ。
ちなみに僕の描いた猫を牛だと言つたのはエリー本人だ。

「ジャックー！」

「エリー、僕はジャックじゃない。僕は日本人。山中泉つて名前があるから

ちなみにジャックとはエリーが僕につけたあだ名のよつたもの。

愛称として呼ばれることすら願い下げの名前だ。

「『めんじめん。』だって最近、泉つたら冷たいんだもん」

頬を膨らませながら、如何にも不機嫌ですよ。と、訴えてくるエリー。

けど、僕が彼女に冷たくする理由はあつたりするが、これがまた実に情けない。

「泉が冷たいのは当たり前だよ。温かかったら温泉だ」

なんて軽口を返しながらお茶を濁そうとするのだけれど、そんなものが自由奔放な人柄に定評のあるエリーに通用するはずもなく。

「冷たいなら泳ぐし、温かいなら浸かるわよ。なんで避けるの？ 家では普通にしてるのに」

「エリー、君は少し自分の容姿を意識してよ。僕は特徴のない、ただの男子。君は構内で一番と言われるほどの美人。そんのが一緒に歩いてみなよ？ どれだけ嫌な視線浴びるか分かつたもんじやない。ただでさえ家が隣つてだけで変ないちゃもんつけられてるのにさ」

つい本音を漏らしてしまつ。

が、この事に僕に比はないだろう。

学校のアイドルと一緒にいって恨み買つよりは遙かに居心地がいい。僕は平穀無事が好きなのだ。

「私の容姿なんて関係ないじゃん。私は好きで泉といってるのに、泉は私というのは嫌なの？」

「やついう訳じゃないよ。ただ、僕は平穀無事が好きなんだ。君の好きな漫画みたいな、学校のアイドルと懇ろになつて全校の男を敵に回すみたいな展開は『めん被りたい』

「そんなの堂々としてればいいじゃない。ビクビクしてるから変に恨み買うのよ。お隣さんで仲が良いのは当たり前なんだから」

それはまあ、そうなのだろうけれど。

都会ならこぞ知らず、ここは片田舎の地方都市。

田畠はあちこちにあるし、昔ながらの家屋に施設もある。僕の家も田畠の真ん中にあって、エリーの家もその隣。近所の世帯数もそんなものだから、必然的に仲違いになるようなことは滅多なことではなり得ない。

エリーと初めて会ったときも、普通に対応していたし。やはり意識しすぎなのだろうか。

「それに、特徴ないとか泉は言つてるけど、泉つてイケメンだから地味に女子と一部の男子の人気高いよ?」

「一部の男子ってなに!?

怖いことを聞いてしまった。

僕の平穏な生活が、学園ライフが破綻していく。
びつじてこんなことに。

「といひでや、返事まだ?」

「え?…えーと、まだ、先じゃダメかな?」

ちなみにエリーの言つ返事とは、僕にたいしての告白であり、エリ

ーはその返事を待っているという状況である。けど、冷静に考えても見てもらいたい。

僕の言つたことを思い返してほしい。

でも、そんなことはお構いなしなのがこのHリーとこの女子なのだ。

性格は面倒見がいいし、勉強だってそこそこ。スポーツは万能で、料理も得意なのだ。ただ、無茶ぶりしたりやたらめったらな甘えたがりだつたりと難も目立つが。

「私、本気なんだけど。私だからいいけど、あまり女の子を待たせるものじゃないわよ？」

「分かってるんだけど……。僕だって、その… Hリーのこと、好きだけど。でも、やっぱりそんな簡単に決められなによ」

「はあー、わかってはいたんだけどね。毎度思うナビ、ビツビツして私は泉のこと好きなんだろ?」

それを僕に聞かれても反応に困るし、地味にダメージ受けるからね。でもその頬はまた膨らみ、色は白みの肌色から桃色の指す肌へと変わった。

照れていることは歴然と言つた様子で、純粹に彼女は僕のことを想つてくれている。

ふと、絵本のことと思い浮かべる。

【世界そのものは嘘で作られた絵本そのもの】といつ、僕の持論。これは、本当によくわからない持論だけれど、有り合わせの幸せを

補填することができるとするなりが、どうでもいいのだ。

エリーの想いを受け入れることが、僕たちにとっての幸せなのだろうか。

それとも… それも、偽物だらうか。

「またお得意の世界は絵本の持論?」

「え?あ、『めん。また、顔に出てた?』

「だったらそんな持論に書き出してあげる。【ビリせ偽物なら、壊れるまでは本物である】ってね」

「どういう意味なのだろ?」
その意味を聞いてみても、エリーはただ、

「ひ・み・つ

と、はぐらかしてしまつ。
本当に自由な女の子だ。

なら、いつその意味がわかるまでエリーに振り回されてしまうと思う。

「わかった。僕の負けだよ。付き合おう、エリー

屋根づたいの距離

エリーの告白を受け入れたのは、ついで昨日のこと。そのあと歓喜の余りに泣いてしまったエリーに抱きつかれた上に、近くを通ったクラスメイトにその光景を目撃されてしまったものだから、休み明けの学校が憂鬱で仕方ない。

けれども、まあ。

悪い気分ではない。

僕だって、健全な男なのだ。

エリーのように愛らしく、気心の知れた少女に告白されて、嬉しくないわけもなく、エリーの想いが更にはどの程度のものなのかはわからないけれど、僕だって彼女のことが好きなのだ。

だから、今はとても気分がいい。

今日は土曜日で、特に進学校なんかではない高校に通う僕とエリーは休みであり、今、僕は自宅の一階にある六畳の洋室である自室にて、宿題を片付けている最中である。
恐らく彼女もそうしていることだらう。

元々僕はこのように休みの始めに宿題なんかするようなマメな性格ではないのだけれど、エリーの要望でこうすることにしている。
エリーは勉強に関してそれなりに真面目に取り組んでいて、宿題のよつな面倒なものを先に片付けてから予習してしまつらさい。

それからは僕の家で過ごしたりしているのだけれど、そのときに僕が宿題なんかしていて遊ぶ時間が減ることが嫌だと、僕にこのようないいを申し付けた。

ちなみにエリーとの交際が始まったとは言えど、僕たちのスタンスには余りに変わりはなく、と言つよりも、変わりようがない。

恐らくは手を繋いだり、一緒に出掛けたりする機会は増えるのだろうけれど、急いで関係を発展させる必要性を感じるような歳でもなく、今までのように友達のような「近所さん」といった付き合いがたになるだろう。

そんなことを考えながら宿題にいそしんでいると、いつのまにか宿題は片付いてしまい、僕はとりあえずとばかりに机を片付けて、床に放置していたゲーム雑誌を棚に戻した。

それから「ゴミ箱の中の「ゴミ」を片付けて、簡単に掃除機をかけておいた。

どうせこれからエリーはやつて来るのだから、部屋を片付けておくに越したことはない。

彼女は潔癖とも言えるほどにきれい好きで、「ゴミ」が散らかっていたりすると、怒って一日不機嫌ということもある。

コンコン、と、窓をノックする音。

僕は窓の鍵を開けて、窓を開け放ち、一言。

「玄関があるんだから、そっちから来てよ」

「えー。うちのが近いからいいじゃん

エリーは屋根づたいに窓から窓へと移動して僕の部屋へと訪れる。我が家についている玄関とインターホンは来客の少ない我が家では、家人とエリーの家である羽犬塚家の人のためにあるといつても過言ではなくなっている。

エリーは窓に腰かけると穿いていたソックスを脱いで、丸めてから自分の部屋へと投げ込んだ。

他人の部屋には汚れたものを持ち込まないと決めているそうで、基本的に室内では裸足になり、帰るときに再び予備で持ってきているソックスを穿くという徹底ぶり。

だから彼女のいつも持つてている鞄のなかには予備のソックスや着替えが入っている。

制服のブラウスにしたって、普通なら一、三着程度で事足りるそうなのだけれど、エリーは午前と午後で着替えるため、七着持つているそうだ。

本人もこの行きすぎた潔癖なところは悪癖として認識しており、今は直す努力をしているようだ。

「それから、毎回言つてるけど、どうして僕の部屋に来るときはそんなに薄着なの？露出高すぎだよ。田の毒だよ。下着とか見えてるんだから、少しあはれを付けてよ」

彼女の部屋着はとてもラフ過ぎて、ただでさえレンダーでスタイルがいいのに、それを惜しげもせずに晒すような薄着をしている。

今日だってキャミソールとホットパンツで、長い髪をサイドアップにまとめあげているだけ。

僕は慣れてしまつてじきまきする」とはないのだけれど、普通に考えてもこれは恥ずかしいだらう。

「私、長袖とか苦手なの。前にも言つたじゃない。それに、下着と水着の区別だつて曖昧な私よ？今さら過ぎ」

「水着つて、まあ、たしかに曖昧かもしれないけど。それでも責めて胸元隠すとかはしてよ。この間、従姉さんに見られて説教されたつていうの?」

「あー、それは本当にごめん。うーん…ならタートルネックにするよ。サマーセーターならノースリーブあるし」

そうしてもらえると大変、助かる。

それにせつときも言つたけれど僕だって健全な男子。

こんな挑発的とも取れる格好を見せつけられていつバカなことをしでかすかなんて、分からぬのだから。

いくら慣れてしまつたとはいってもだ。

そうならないとは言い切れないのだから、自重してもらいたいものだ。

「まあ、今日まで我慢して」

と、部屋の中へと入りながらそつづぶやいた。

けどまあ、今日は例の説教された従姉さんはいないから、大丈夫だる。

母さんも父さんも、エリーのことは知つてるし。

「あー、お部屋の掃除したら疲れたー…」

「お疲れ様。僕の部屋はそんなに綺麗じゃないよ」

「泉にそんなこと求めてないわよ。私が気にしちゃわないくらいでいいの。それとも、お部屋、私が掃除していいの?」

それは勘弁願いたい。

なにせ、部屋のあちこちに隠された思春期の聖書がちらほらとあるのだから。

「別に泉がエツチな本持つってても怒らないけど？興味あるのが普通なんだし、無かつたらホモとか疑うわよ？」

「そんなものを見つけられでもしたら、明日の我が身に首は無し。家族会議は確定的で、更には従姉さんにも叱られてしまうだら！」

そんな慈愛に満ちた目で僕を見ないでいただきたい。

そういうのに興味はあるけど、そういう本とかは嫌いっていう男
子はいるんだから。

「私の性格的に泉がそういうことを望んでも、たぶん無理なんだしそうでない」とね」

「アーティストヒカル」が書いた歌詞

「相変わらず下ネタに弱いなあ。顔真っ赤じやん」

僕は別に普通だと思うのだけれど。

エリーがやたらと下半身ネタにつよいだけだから。

エリーは普通と少しずれた羞恥心を持つていて、例えば、風にあおられてスカートがまくれ上がりつても意にも介さないのに、髪を撫でられたりすると異様に恥ずかしがつたりするのだ。

と、僕はとうあえずHリーの髪を撫でておいた。

うん、きれい好きのエリーらしく、しっかりと手入れの行き届いた美しい髪で、さわり心地は極上の一言につきる。

「あ、い、泉、恥ずかしいからやめて…」

と、本当に恥ずかしそうに身を屈めてしまった。

けど、止めてやるつもりはなくて、僕は私物としてエリーが置いている櫛を取り出して、上手くはないけれど彼女の髪をすべく。

エリーの顔はリンゴのように真っ赤になり、なんとも可憐らしい反應を返してくれる。

けど、ここでふと、ひとつ疑問が浮かんだ。

潔癖な人というのは、体、特に髪なんかには人が触れることが嫌がると聞いたことがあるのだけれど、どうしてエリーは嫌がらないのだろうか。

結構な頻度で僕は撫で付けていたりするのに。

「泉だからよ。他だつたら…殴つてる」

「彼氏特権つてやつなの？」

「…といつか、彼氏じゃなくとも泉だから、許してるの。恥ずかしいのも我慢してるのよ。好きだから…触つてほしいの」

「なんといつか……僕の方が恥ずかしくなってきたよ」

「私はもつと恥ずかしいの一…ねえ、今は幸せなの?」

少しだけ影を落とすような、そんな寂しそうな表情をするエリー。

それは僕の感じている幸せを偽物だと、僕が思っているからなのかもしれないから。

そんな影の薄化粧を見てもなお、僕は答えを返せない。

どうしてなのだらうか。

たしかに、Hリーのことが好きで、Hリーと一緒にいると満たされるけれど。

それでも、それは嘘つきな、絵本のような世界だからかも、と。心のどこかで感じてしまつていてるからなのかも知れないから。

「…私が、本当の幸せを教えてあげるから。少なくとも、私はすぐ幸せだもん。この幸せが…偽物のはずがないもん。…嘘なわけ、ない」

僕へと体を翻して、ぎゅっと僕を抱き締めた。

紺碧の瞳からは涙が溢れて、僕が本気で彼女との恋愛を楽しめないことを、真剣に心配してくれた。

交際している張本人が、心配してくれるのだ。

それはとてもありがたいことで、とても幸福なことなのだらう。

「あっがとう、Hリー」

僕はそつと、彼女の細い体を抱き締めた。

そんな音がなり、この部屋の時間が一瞬だけ停止した。

「やつほー、泉…って、何してるの、あんたら」

ガチャつ。

従姉さんだつた。

おかしい、たしか今日は彼氏さんとのデートで来ないはずだつたはずの従姉さんが、どうしてこられるのだらうか。

「……えーと……実は僕たち付き合って……」

「…ふーん。それはまあ、やつとかつて感じだけれど。お姉さん、そういうのはまだ早いなって思うんだよなー。エリーちゃん、泣いてるけど、なにしたのかな?お姉さんに泣かんと説明してほしいんだけどなー」

まずい。

顔は笑つてこいるけれど、田が笑つていない。
ちなみに従姉さんは警察官で、性犯罪の捜査官でもあるため、こういつた誤解はとにかくまずい。

誤解ではあるけれど、この抱き合つてこいる体勢に、泣きじやぐるエリー。

うん、弁解しようにも潰されていく。

「…ぐす、お姉さん、誤解。…私が、勝手に泣いただけ。私、気持あのメントロールがへたくそだから」

エリーがフォローしてくれる。

「エリーちゃん、そんなに屁う必要はないんだよ?ほら、何されたかについてじらん?」

「だから、私はなにもされてない!泉は私にひどいことなんてしたことない!いつもみたいに私の薄着を注意して、呆れてたんだから!…それに……たしかに何かされたら怖いかもしけないけど、泉なら許せるもん。そのくらい好きなんだもん。お姉さん、警察官だから疑うのは仕方ないも知れないけど、泉は私にひどいことしてないもん。優しいもん。ぎゅっとしてくれたんだから」

涙声で涙と鼻水で顔を汚しながらも、必死に僕のフォローをしてくれていた。

従姉さんの疑り深さも病的ではあることせよ、職業上仕方ない部分もあるから、いつもは従姉さんが落ち着いてから説明している。

でも、そんなことは百も承知のはずのHリーは感情のコントロールが決壊し、とにかく僕は悪くないと訴えている。

なんていうか、かなり痛々しいまでに愛されていふと感じた。

「うー、『めんね。泉も、Hリーちゃんを大切にしなきゃダメよ?』

「うん。ほひ、Hリー。ぼくは大丈夫だから」

「うん。…………うえ……顔汚い。洗面所借りるね

Hリーは部屋を出て洗面所へと赴き、僕はひとつため息をついたあと、Hリーの涙と鼻水が付着した服を脱いで、着替えた。

Hリーが帰ってきてから付着したものを着ていたら怒られてしまつ

し。

従姉さんが口を開く。

「あのわ… やつきの、『めんね』

「うん。気にないで。Hリーのこと心配してたんだからね」

「うん、まあ…ね。でも、やり過ぎたよ

「これからおいで直せばいいよ

「まさかエリーちゃんがあんなにあんたにベタ惚れなんてね

苦笑い。

けど、たしかに、今のフォローには驚くばかりだ。
そんなにまで、僕を好きなんだと嫌といつほど感じたけれど、それ
でもやはり、エリーに好きだと言われて嬉しい僕がいる。
これは、これだけは嘘だとは…思いたくない。

そんなやり取りから、少し時間がたち、頃合にはお昼も十一時でお
昼時だ。

さて、今日は母さんはぐーたらするとか言っていたから僕が作る他
ないのだけれど、なかなかどうして僕は料理が苦手だ。
昔、包丁で指を傷つけて以来、怖いのだ。

「インスタントラーメンでいいかな。エリーはなにか食べたいもの
ある?」

女の子らしく甘いもの好きで、かつ味についていきエリーは不思議な
ことにラーメンが好きだ。
ラーメンのスープが跳ねて服につくからと、普段は食べないらしい
のだけれど、僕が作るさいには一緒に食べたりする。
そのときは僕のタンスから勝手にジャージを取り出して着用して、
スープから衣服をガードしてたりする。

男性もので大きめのジャージを細身のエリーが着ればどうなるか、
そんなことは想像しなくともわかる通り、かなり袖や裾がぶかぶか
だ。

それが大人びて見えるはずのエリーを幼く見せるので、いつもと違う彼女にどぎまきしてしまつたりもする。

「なんだつたら、私作るけど?」

「いや、台所は明日掃除だから散らかってるんだけど

ちなみに油汚れとかあるが。

我が家は一週間に一回、日曜日に台所のシンクやガスレンジを掃除している。

包丁やまな板は毎日使う前に消毒しているものの、やはり水回りは綺麗にするべきだとして、母さんが取り決め、家族で行う行事となつていて。

「それは分かつてるから大丈夫。材料はあるの?」

僕は床下に設置されている収納や冷蔵庫の野菜室を覗いて伝えた。

「一インジン、タマネギ、ジャガイモ、バター、ニンニク、豚肉、鶏肉…だね。調味料は一昨日一緒に買いにいったるし、分かるよね?」

「それ、カレーでいいじゃん」

たしかに。

何を作るなんて悩む必要もなく、カレーの材料しかないと言える。ポークカレーかチキンカレーかは僕とエリーは真逆の好みなので少し考えるけれど。

「じゃ、チキンカレーで」

「いや、ポークカレーでしょ」

やつぱり別れた。

僕は豚肉が好きなのだけれど、彼女は鶏肉が好きなのだ。
僕は個人的に唐揚げみたいにしてあれば鶏肉は好きなのだけれども、
カレーなんかにはいるとどうしても鶏肉はパサついて食べづらいの
だ。

「…じゃ、今日は豚肉」

あれ？ 今日はあつむりとひいた。
いつもなら僕がおれるのに、珍しいこともあつたものだ。

心的外傷 PTSD

「ね、キスしようつか

お皿にエリー特製のポークカレーを食べてから、一時間あまり。自室でくつろいでいると、唐突にエリーがそんなことを口にした。

「急にどうしたの？」

「え？ 好きな人とキスしたいのって、当たり前じゃないの？」

いや…まあ。

普通に考えるとやうなのだろうけれど。けど、エリーの行きすぎた潔癖を考えるに、例え僕でもそういうのは無理なんぢゃないのかと、思つてしまつ。

自分の体液である涙や鼻水にすらも激しく嫌悪するのに、他人とキスだなんて。

ことを急ぐ氣はないし、エリーだって辛いのではないか？

それとも、髪同様に彼氏特権というもののなのだろうか。

「トラウマ解消できるか、知りたいの。試すよつて悪いけど…私はキスして。そしたら、私のトラウマを教えるから」

その言葉は力強く、覚悟を決めたかのような、強い意思をも感じさせた。

「『めんね、こんなこといつて。泉とキスしたいのは本心。でも、

トラウマがあるかぎりは、それを喜べないから

エリーはそういうと、そつと体を寄せてきた。

エリーはこういっている。

でも、僕はどうなのだろうか。

たしかに僕も彼女とのキスはしてみたいとおもうけど。

それも、やはり。

やはり、偽物としか、嘘だとしか感じ取れないのだろうか。

「……やっぱり、こいつのは嫌よね

エリーが少し、落ち込んだ表情を見せた瞬間に覚悟が決まった。

僕は彼女の細い肩を抱き込むとそつと、できるだけ優しくキスをした。

それから数秒。

僕はエリーの薄い唇から離れた。

「……エリー？」

エリーは涙を流していた。

そして、なにかに怯えるかのように、身を抱き、震えだす。

「だ…大丈夫。大丈夫だから。…約束、だから。話す…ね？泉には隠し事したくないから。…話すね」

「……うん

僕はそつと彼女の肩をだく力を弱めた。

そうすると、エリーの震えは、少しだけ修まつた。

「……私ね、こっちにきたのはね。昔住んでた街で……塾から帰るときに、変な人に車に連れ込まれたの。それで……乱暴されたの……。怖かった。痛かった。色々な所に嫌なのが触れて、あちこちに触られて……」

「それは、つまり。

強姦されたということらしかった。

けどこれで、エリーの行きすぎた潔癖の真実が、見えた。

心的外傷。

PTSD。

トラウマ。

エリーは乱暴されたときには付着した相手の体液が未だに落ちない錯覚に陥っていて、彼女が自分の体液すらも嫌がるのはその延長。薄着だつて、トラウマを晒することで、人から見られることで、その事実を自らには「写さない」とやつこした。

「ごめんね……。嫌だよね、こんな、すでに汚されてる体なんて。欲しくないよね。いくらお風呂で洗つても、落ちないんだよ。こんなのが、泉がさわつたら、汚れちゃうよ。抱き締めてくれてるのは嬉しいけど……泉に付いちやうよ……」

泣きじゃくりながら、僕に過去にあった出来事を教えてくれた。

「大丈夫だよ。エリーが汚れてるなんて、どこが汚れてるの? こんなにきれいな肌してる。僕は女じゃないから君の辛さを共有してあげられないけれど……。それでもさ、君が好きなんだ。エリーだつて本当は男なんて、本当は怖くて仕方がないのに僕に告白してくれた。僕に恋してくれたんだ。だつたら、君のそのトラウマが消えるまで、待つから。僕は君に返事を待たせたから。今度は、僕が待つてあ

げるから。ずっと、ずっと、「

それは紛れもなく僕の本心だ。

彼女の過去を知つてもなお、僕は彼女と過^ハりしたいと思つた。

それは決して嘘でも偽物でもないと、思えるたしかなものだつた。

「いいの? 高校、卒業するかもだよ?」

「いい

「おばさんになつちやうかもしれないのに?」

「構わないよ」

「おばあちゃんになつても?」

「君が大丈夫になるまで、待つか。僕が君を守るから。だから…
今度は僕から。… Hリー。僕と、付き合つてくれないか?」

かなりめちゃくちゃだし、格好もつかないけれど。

僕はありつたけの想いをHリーに届けるために告白した。
すでに恋人である、少女に、愛の告白を。

「うん。うん。ありがとう。泉、待つてね。私、頑張るから。ち
ょつとずつだけれど、私のこと、あげられるよっこ、頑張るから…」

本当に今日のHリーは感情のコントロールが出来ない。

今だつて、嬉しくて泣いているのか、怖くて泣いてるのか、本当に
わからないくらいめちゃめちゃだ。

体は震えてるし、僕の腕をつかむ力は強くて、爪が食い込んでいる。

でも、涙と鼻水でめちゃくちゃな顔はたしかに、嬉しそうに笑っているのだ。

「……泉い。大好き」

「うん。僕も。本当はね、僕、高校はいった頃からエリーのこと…好きだつたんだよ」

「……私、もつと前から」

「あはは。負けた。……僕も、ひとつ教えるよ。僕が、世界を絵本に例えだした訳を」

僕は彼女の髪の毛を手ですいてあげながら、秘密をさりしてくれた彼女に、僕のことを教えることにした。
特筆して秘密ではないけれど、けど、これも一種のトラウマなのかもしれないから。

「僕はね、昔、妹がいたんだ。僕より一つしたの、可愛い妹が

初めてエリーに話す…というより、こんなこと、初めて人に話すのかもしれない。

世界を嘘で作られた絵本だとする僕の持論は、僕の親しい人は皆知つている。

エリーしかし、家族に友人。

でも、その持論に至る過程を、誰も知らない。

「妹はね、遙つていうんだ。…よく覚えてないんだけどさ。僕と遙

はね、すごく仲が良かつたらしいんだ。それこそ、何をするのも一緒に感じで。僕と遙はね、毎日、絵本を読んでたんだ」

「……絵本って、あの？」

エリーは僕の机の引き出しを指差した。

その引き出しには、妹が遺した絵本がある。

僕の宝物で、嘘の証明。

「うん。……でもね。遙は殺されたんだって」

それは昨年聞いた、真実。

僕が大きくなり、犯人の刑が確定したから僕に伝えたそうだ。

「本当によくわからなかつた。まるで絵本だなつて。遙と遊んでた記憶はあるけど…もう薄れてしまつてるんだから。せめて忘れないようにあの絵本を持つてるけど、それでも。絵本からキャラクターを切り取つたみたいに、すっぽりといなくなつたんだから。そしたらそこにいたキャラは嘘。新しいキャラが入つて穴を埋めるけど、それも嘘。嘘だらけ。嘘で作られた世界は絵本なんだよ。だから、僕はそう考へてるんだ」

支離滅裂になつたけれど、でも、うまくまとめきれないのだから、それは許してもらいたい。

「…なら、私も、嘘？私はここにいて、泉とキスしたんだよ？」

「うん。…でも、まだ、うまく実感が持てないんだ。まるで、僕がゲームで僕を動かしてゐるような、そんな奇妙な…」

まるで、離人症のような、そんな感覚。

「なら、私がそれを直す。怖いけど、キスはできたから。何回でもキスをして、ぎゅっとして、私が嘘じゃないんだって、教えてあげるから」

それは、とても気持ちのいい言葉だった。

心のそこから僕を受け入れてくれる、そんな慈愛に満ちた瞳が、僕を見つめている。

そして今度はエリーから優しくキスをくれた。

恐怖に耐えながら、有言実行とばかりに。

そして、唇が離される。

「……ね？私も頑張るから。だから、泉も頑張り？」

震えながらも、笑みを浮かべて僕を見てくれた。

エリーはこんなにも強がつて、トラウマを克服しようとしているのに、僕も直さなければ、エリーといふことは出来ないだろう。

「うん。これから、よろしくね。エリー」

浴衣姿と説教とやきもじ

お互いの心の迷いを打ち明けてから、一ヶ月あまりが経過した。

学校は終業式を迎えて夏休みに入り、今日はその初日。

この季節になると僕たちの地元は夏祭りを開催し、地域をもり立てる。

ちなみに今日がその祭りの日で、近所…とはいっても歩いて20分くらいの場所にある神社で行われる。

ちなみにこの神社ら何を祀っているかは地元の人でも知らないから、知つてるのは神主くらい。

歴史ある神社らしくて境内も広く、住み込みで巫女さん達が数人働いているらしい。

たしかに見た目は荘厳ではあるけれど、僕とエリーにとつては祭りの開催地や初詣の場所というイメージしか湧かない。

「ジャックー」

窓を開けて本を読んでいるとエリーがやってきた。

ちなみに格好は以前だした僕の要望に沿つてタートルネックのノースリーブ。

胸元さえ見えなければ、変に意識したりはしなくてすむし、何よりそういう視線を怖がることがわかつたエリーのためになるから、二人にとつてもいいことだ。

理由が理由であれ、肌をさらしすぎるのはあまりいただけないのは本音だけれど。

「僕は泉だつてば」

「えへへ。夏祭り、今夜だねー」

靴下を脱いで丸めながらそういうと、自室へと投げ入れて僕の部屋へと入ってくる。

そしてベッドに寝転がる僕の隣に座り込んだ。

「別にお祭りなんて初めてじゃないでしょ」

「……初デート、なんだよ?」

あ、そうだった。

基本的には付き合いかたは以前から変わらないものだから、デートだとかはしたことがなかった。

それに、たまに出掛けるといつても、家族ぐるみの付き合いがほとんどの山中家と羽犬塚家は仲良く出かけることがほとんどであり、一人きりで…というのは、まだ無かったのだ。

「…そうだね。いつもは部屋で遊ぶだけだから、たまにはデートしながらやね」

ちなみに僕もエリーも毎年、夏祭りにはいつているのだけれど、僕もエリーもそれぞれの友達と一緒にいつているため、これまで一人でいたことはなかった。

そう考えると、なんとなしに楽しみになってきた。

「…さ、今日…やっぱ、手を繋いづね!」

そう、まだ僕たちは手を繋いだことがないのだ。

理由はエリーの過去のこと。

けどまあ、理由はわかっているし、キスもハグもしているのだから、あまり慌てるようなことじやなきけれど。

順序がめちゃくちゃなカップルである。

「そんなに無理しなくてもいいよ？ また泣いちゃうかもしねないんだし」

以前、手を繋ぐとトライしたときには、あまりの恐怖感をエリーが感じてしまつたために、指先が触れた段階でエリーが号泣、断念することとなつた。

しかし、最近のエリーも不思議なことで、泣いているときに髪をすいてやると泣き止むのだ。

「…うん、私、泉と手を繋ぎたいの。私は泉が大好きなの。泉と付き合つてゐるんだって、友達に知らせたい。手も繋げないのに言ったところで信じるひとたちじゃないでしょ？」

「そうだね。特に、僕の友達なんかは」

変わり者揃いで面子も濃いものだから、相手するのて多少疲れたりする。

けどまあ、気心知れていてよく遊ぶ仲間でもあるから、信頼をおくことは保証付きだけれど。

「手を繋ぐのが無理なら、腕を組むとか！」

「ハードル上がってるよ

「そりなんだけど、ほら。私ってハグは平氣になつたから、そのノリで行けるだろうし」

ともかく、僕と恋人らしいことをしたいといふ。

僕もいい加減、エリーについてのいちやもんにもうんざりしていることだし、エリーは僕の彼女だと、堂々たるとして胸を張りたいところだ。

そんなことを思つてみると、いつも伏せている僕の背中に、エリーが覆い被さる。

腰の位置で座り込み、中背のあたりで手を落ち着かせている。

「何してゐるの？」

「んー、手以外の所は平氣なのになあ」

と手を肩の位置まで這わせて、肩をつかむ。つかんでは離し、つかんでは離しを繰り返す。ああ、なるほど。

エリーはマッサージをしてくれていたのか。

「あんまりこつてないんだね」

「まあ…運動とかしてる訳じゃないしね」

バイトはしているけれど、それは在宅のもので、パソコン操作による書類の作成、コピーの内職のようなものだ。

毎月、お小遣いはもらえるけれど、とりあえずこの先のことも含めてお金はある程度補填したいと思つて先月から始めたものだ。

パソコンの操作はある程度マスターしているので、特に苦労もなくノルマを片付けていて、先月は三万円ほど稼ぐことができた。

ちなみにこれは今日の軍資金だ。

「何着でこいつかな」

Hリーはそう呟いている。

容姿端麗で輝くような銀髪が麗しく流れのHリーなら浴衣なんかも似合にそうだと思つ。

「…浴衣だと着替えられないしなあ…」

Hリーの潔癖は以前ほど激しくはないけれど、それでもやはり体液に関しての嫌悪は健在で、僕の部屋でも汗をかくと、その場で持ち込んだ服に着替えたりする。

「Hリーの好きな格好でいいよ。浴衣も見てみたかったけど…無理は言えないしね」

「…」「めんね。来年」「せ、ちやんと着るから」

「気にしないで。それに、Hリーは綺麗だから何を着ても似合つだろつしね」

そういったとたんに、Hリーの顔は赤く染まった。

僕は普通に誉めただけなのだけど、Hリーには恥ずかしかったらしい。

「ゆ、浴衣も着る……。一日べりご……、汗は我慢できるもんさ

「いや、無理しなくていいよ」

「か、可愛い私をみてもらいたいのー。」

ああ、なるほど。

けどまあ、今しがた僕もエリーの浴衣姿を見たいと思つていたところだし、田の正月にあやかれるのは、行幸といつものだ。なまじつか美人であるエリーなのだから、すごく楽しみだ。

とりあえず、言い出したらきりがないエリーのために、タオルの数枚は常備しておこうことにしよう。そして、帰りは銭湯にでも寄つてから帰ることにしようか。

「…うーん、でも、私は立つのは嫌だもんなあ。銀髪だし、碧眼だし

ロシア系イギリス人を祖父にもつ彼女の髪は流れんばかりの美しい銀色で、まるで星空にとかした川のよう。

瞳の色も深い紺碧色で、まるで空と海の境界を眺めているかのよう、そんな美しさがある。

それに加えて、整つた田鼻立ちとスレンダーで長く細い手足。まるでモデルのようなのだ。

目立たないわけもない。

実際は彼女の両親ともに黒髪なのだけど、染めているのについてはないらしい。

父親の方の瞳は紺碧とブラウンのオッドアイだから、父親方の血が濃いのはわかるし、銀髪は覚醒遺伝といつものだらう。

「悪田立ちじゃないんだし、いいんじゃないかな」

「やうなんだけど…。でも、クラスの男の子には会つだらうから、

ちゅうと怖いの」

まあ、たしかに。

それなりの規模の祭りだし、クラスメイトのみならず、全校の男
女が一同に会する可能性もある夏祭りだ。

当然、校内で一番とも言われる人気を誇るHリーのことだ。
必ず声をかけられるし、あれこれとしつこく絡まれる」とは講け合
いだ。

「………… ゆー」

僕はひとつ考え付く。

けどまあ、打開策と云ふよりは妥協案なのが。

「Hリー。浴衣姿は、今から……僕だけに見せてくれないかな？お祭
りまでは部屋でデートしちゃう」

在宅デート、皿室デートといつものが昨今では主流であり、基本的
には僕の部屋で過ごすことの多い僕たちだ。

服装を浴衣に変えるだけで気分も変わるものではないだらうか。

「……うんー、デートーーー」

ビービーにも本当にピートーーーにしだわりがあつたようで、ピートであるな
らば、在宅だらうが夏祭りだらうが変わらないらしい。
つまり、形式にこだわっていたのだ。

「それじゃ、着替えてくるねー。」

ソックスを脱いで、窓から出たとれりと皿室に戻つていった。

ちなみに我が家家の屋根は平たくて、傾斜はない。

エリーの家もそうだ。

屋根と屋根の隙間だつて20センチ程度だから何かしらトジを踏まない限りは落ちないだろう。

でも、やはり思ひことはひとつ。

「玄関使つてよ……」

その一言に思われるものだ。

エリーが着替えに戻つてから數十分。

恐らくは慣れない浴衣の着付けに手間取つているのだろう。ただでさえ慣れなければ難しいのだから、仕方ないのだけど。とくに女性の浴衣にはおはしょりもあるし、帯だつてあるから、気付けは難しさと面倒さが両番でやつてくる。

かくいう僕はすでに愛用の浴衣。

普段あまり着ることはないけれど、一度覚えた着付けはなかなか忘れることはなく、とりあえずエリーに会わせてみたのだ。

ピンポーン。

チャイムがなつた。

恐らくはエリーが着替えたのだろう。

さすがに浴衣のままで屋根を歩くわけにはいかないので、おとなしく玄関から来たのだろう。

毎回玄関から来てくれないだろうか。

階段を降り、玄関まで歩いてから念のために覗き窓から外を見ると、やはりエリーだった。

僕は玄関を開け放つとエリーを招き入れる。

「あ、あの…どう変じやない？」

そう言つて玄関口でくるつと一回転。髪は後ろでアップにまとめられて星の髪飾りを刺していて、後れ毛が眩しうなじ美人に。

浴衣は黒地に赤と黄色の金魚の模様が優雅に映えて、帯は浴衣の模様を殺さないように無地の山吹色。

そしてそこには紺の帯留めにエリーの瞳と同じく紺碧の蜻蛉玉が眩しく輝いていた。

「……」

思わず見とれてしまった。

いつも見慣れているエリーが、別人に写ったから。照れながら僕に余すことなく浴衣姿を見せてくれるエリーはとても美しくて、僕はただ頷くしかできなかつた。

「ど、とうあえず上がりなよ」

そう言つて僕は彼女を先に部屋へと通して、飲み物を用意するためキッキンへとむかつた。

ダイニングには従姉さんがいて、今の僕の反応について見ていたのか、笑つていた。

「あんた、エリーちゃんに見とれすぎ」

と、ケラケラ笑っていた。

「ほつといてよ。本当に可愛かつたんだから」

「まあー、あれは彼氏の欲目抜いても可愛いよね。精々、お祭り楽しみなさいな。私は痴漢をし�ょっぴくだけだし」

従姉さんのいる性犯罪捜査の部門は今回の夏祭りでは痴漢やスリなどを防止するために配置されるらしい。

そして神主や主任達との事前の会議が終わったので、昼休みを利用してくつろぎに来ているのだ。

ちなみに格好は私服警官なので私服。

Tシャツにジャケット、ジーンズという動きやすそうな出で立ちだ。

「やうするよ。従姉さんも、頑張つてね」

「何もないなら頑張らなくていいの。性犯罪はね

、今日起こらなくとも、明日起こるかもしれないし、明日じゃなくとも明後日かもしれないんだから。こればかりは犯罪全体の話だけどね」

身に積まされそうな話ではあるな。

先日聞いた、エリーの過去だつて。

もしかすればエリーが性犯罪の被害者にならなくとも、だ。

他の誰かが、あるいはエリーが別の日に被害を受けたつてことも、あるから。

従姉さんはもう何年もそういう事案に携わり、そう言つたことをした人達を相手取ってきた。

だから、気楽ではいるけど、気は抜かないというスタンスでいるのだ。

それに…、エリーが僕以外に過去を話した、唯一の人だ。
だからこそ、僕にはこうして釘を指すように申すのだろう。
だからこそ、身に積まされそうなのだ。

「確かに、性犯罪…特に痴漢は冤罪だつてあるけどね。女性の証言のみで片がつくことだつてある。私もそれは気に入らないもの。けど、強姦とかは違う。あれはDNAが出るもの。でも、捕まえても、それでも、刑務所から出たら…また繰り返す人も多い。私はそれが悔しくて仕方ないのよ。あんたがエリーちゃんを大切にしてるのは知ってる。でも…もし何かあれば、私はあんたでも許さないからね」

一つの観点からものをのべる。

それはある種の達観ともとれる言葉。

従姉さんは僕がエリーを大切に出来るかを、試しているのだ。

性犯罪には痴漢や強姦はあるが、家族間の性的暴行に、カップル間の性的暴行すらもカッパライズされるから。

「はあ…疲れてんのかしら。あんたにこんなこと言つなんてね」

苦笑いを浮かべ、ほとほとあきれたようにため息をついた。

近年は特に性犯罪が多いと聞くし、学校でもその手の指導が行われるに至るほどに劣悪だそうだ。

そのぶん、従姉たちの負担は増えるのだから、こうして説教を垂れるのも仕方のことなのだろう。

「僕たちは大丈夫だよ。もし何かあれば…そのときは遠慮しないでエリーの味方になつてあげて」

僕はジュークとお菓子を盆にのせて、キッチンをあとにした。

部屋へと戻ると、ベッドに腰かけているエリーが、僕の隠してあった思春期の聖書を手にして、涼しげな顔で、というか、侮蔑の入り交じった表情で眺めていた。

「あ、あの……エリー……？」

「ジャック？」

怒気の入り交じった声に、思わず身がすくんでしまう。

あんなに怒るエリーは初めてだ。

いかにもな不機嫌といった具合に頬を膨らませ、目尻には涙。

「『じめんね、私胸ないもんね。やつぱり男の子つて巨乳がいいんでしょ？』

「あ……いや、その。偶々だよ、偶然」

確かにエリーはスレンダーなぶん、バストなんかは控えめだ。でも、人それぞれにバランスがあるのでから気にしなくても……つて、今は何をいつても言い訳にしかならない。

「泉がこういう本を持つてるのはいいよ。男の子だし、私は無理なんだから。あー、もう！なんで私はエッチな本にやきもけやっているのよー！」

と叫んで本をゴミ箱へと投げ入れた。

ちなみに僕のすむ町では本は古紙回収でしか捨てられないのだが、ゴミ箱へは捨てられないのだが。

「後学のため……って読んでみたけど。ねえ、泉はやっぱりおつき
方がいいの？」

「……さうでもないけど。とまあえ、恥ずかしいからこの話題は
止めようよ」

僕はテーブルに盤を置いて、熱くなつた顔を隠すためにベッドへと
身を投げてうつ伏せた。

激励と恋路と友達と

従姉さんと話して、絶対にエリーを大切にすると誓つて、エリーに思春期の聖書を発見されて大泣きされてから、数時間。

しばらくは不機嫌ながらも甘えに甘えたエリーは一度帰宅してシャワーと着替えを済ませてから、僕たちは神社の祭りへと向かった。

今は自宅と神社を結ぶ道程の中程で、町から巫講師離れた場所にある農道のような道。

周りは田畠がならんでいて、僕たちの家のように田畠のなかに住宅がちらほらと見える。

その中でのひとつの家に、僕たちは立ち寄ると、インター ホンをならした。

少ししてから反応があり、玄関扉が開け放たれ、僕たちと変わらない年頃の少年と少女が出てきた。

「おっす。急に誘いかけて悪いな」

「気にしないで。僕たちもお祭りには行くつもりだったから

僕より少しだけ背の高い彼は、僕のクラスメイトであり、気心の知れた友人の一人でもある、桜井昌樹。

サッカー部に所属していて、次期主将といわれるくらいのプレイヤー。

「エリー、あの話、本当なの？」

と、エリーに話しかけたのは昌樹の双子の姉であり、僕とエリーの

友人の桜井小春さん。

女子テニス部の部長を勤めていて、高校レベルではトップクラスの実力者らしい。

高校に入学したての頃はエリーをテニス部に誘っていたのだけれど、汗をかくことを極端に嫌がるエリーの意思を尊重して、それ以降は勧誘しなくなつた。

「…うん」

エリーは頷くと、そつと僕の方へと距離をつめて、腕を組むように抱きついた。

たしかに、ハグができるのだから、その勢いでなら腕を組むなんてこと、造作もないようだ。

「あんたたち、やつとくつついたのね。残念だつたわね、昌樹。エリーは山中のものになっちゃつたわよ」

「んなもん、最初にふられたときに諦めてるよ。羽犬塚、良かつたな」

「うん、ありがと」

「それじゃあ、行きましょ。早くいかないと、人がごつた返すし」

小春さんがいつた通り、早めにいって拠点的な場所を確保しなければ、あまたに及ぶ人が群れをなすために、集団では行動しづらくなる。

ちなみに去年までの拠点は、境内にある大きな銀杏の木。そこを拠点にして、一人一人が食べ物やら飲み物やらを調達していくといったことをしていたので、今年もそうすることにした。

「いや、でもまさか泉が羽犬塚と付き合つなんてな。お前、二ヶ月くらい前までは羽犬塚は苦手だとか言ってなかつたか？」

「エリーは美人だからね。校内でも人気あるし、家が隣だから。理不尽な理由で恨まれたことあるからさ、それでそういうことにしておいたんだよ。でも、エリーのことはずっと好きだったんだよ」

「なんともお前らしいというか。サッカー部の野郎共にはオレから言つとこしてやるよ。バカ抜かしてねえで練習しろってな」

「ありがとう。でも、昌樹はエリーのこと、好きだつたんだね」

先程聞いたときは少しだけショックだった。

でも、ひとの、それも友人の恋路に口を挟めるような人間でもないし、エリーを恋慕う男子は僕を含めても多いのだから。
それはまあ、仕方のないことだ。

「ふられたときに、羽犬塚がお前のことが好きだつて言うのに気づいてな。それからは応援してたんだ。やっぱ好きな子には楽しそうに笑つてもらいてえじやんよ？」

純粹にそう思つてくれていたのだろう。

力強く僕の肩を叩きながら、そういつた。

彼は友人たちのなかでも、大親友とも呼べる存在。

喧嘩したりすることもあるけれど、それはやっぱり…、友達じゃなきゃ出来ないことだろう。

本当にお互いのことを分かつてゐるから、本氣で喧嘩することができるので。

なら、僕とエリーは？

僕とエリーは、お互いを知っている。
いや、知りすぎているとさえ言える。

それでもやはり、喧嘩したりするのだろうか。
気に入らないことを、遠慮なくぶつけ合えたりするのだろうか。
でも、それでもし…エリーを傷つけてしまわないか、不安になった。

「…？ 泉、大丈夫？」

エリーは心配そうに僕の顔を覗き込む。

「うん、大丈夫。少しだけ…考え方」

心配させたくないと思って、ついいつてしまつ。
けど、これもやはり、エリーが心配してしまつ」との原因だ。
僕は考え方をすると表情が消えるらしい。
エリーからすればそれは辛そうに見えるといつ。

「悩みがあるなら…言つてね？ 私でよかつたら、聞くから。協力するから」

「本当に大丈夫だから。いつもの癖だよ。エリーは心配性だね」

僕は空いている方の手で、エリーの銀色の髪を撫でてあげる。
恥ずかしがりながらも、エリーははにかみながら嬉しそうに委ねてくれた。

「エリー、本当に山中が好きなのね。どうしたらそんなに惚れられるのよ？ 確かに、山中は女子の人気高いけど。あと、一部の男

子」

「やつぱり男子に人気あるの…？怖いよ！僕の高校生活を仇花で彩らないで…！」

僕は別に女顔だつたりするわけでもないし、体だつて細くも太くもない、背だつて普通なのに。

女子の場合でも頭を捻るのに、男子まで来ると頭痛を覚える。本当に勘弁してもらいたい。

「あはは。まあ、その辺りは置いておいて、何でなの？」

「…うちに越してきた時、私はね、人が怖かったの。今でも…ちょっと怖いけど。でもこんな髪だし、目の色だから。やつぱり人が寄ってきてきちゃうよね。怖くて仕方ないとき…泉はクラスメイトの人たちを言いぐるめて、距離を開けてくれたの。それで、帰りなんかもバスに遅れたりしたとき、暗くなつてたら、一緒に帰つてくれた。ご近所だからって、そんな軽い理由だけで、当たり前みたいに優しくしてくれたの。…そしたら…いつのまにか好きになつちやつて

嬉しそうに語るエリーは、思い出を反芻しながら皿を細めていた。けどまあ、たしかに。

僕は隣の家だからという感覚で彼女のサポートをしていたのは確かだ。

人が群がれば、集まられるのは苦手みたいだからと、それとなく噂を広めたりしたし、帰りも暗ければ一緒に帰つたし、傘を忘れてたら貸してあげたりもした。

無意識に行つていたことが、エリーの意識をこぢらにむけたのか。でも、そんな偶然も嬉しく感じる。

だって、それは本当に本物だって、わかるのだから。
嘘で塗り固められた好意じゃなくて、心からの想いだから。

「そりゃ惚れるわ。私でも惚れるわ。ナチュラルにそんなことやつてるなんてね。嘘の世界に住む人だから、何しても無関心か…。それが運よくエリーの心を射止めたと。本当に絵本みたいだわ、それ傑作だとばかりにおなかを抱えて笑う小春さん。

でも確かに、まるで本当に絵本のようだ。

あるいはきれいに色付けされた漫画か、小説か。
どれにしたつて、笑えて仕方がない。

気持ちちは真実でも、やはり僕たちは嘘で作られた絵本の中のキャラクターなのだろう。

滑稽すぎて、吐き気すら覚える。

「……でもね。私、泉の手だって握れないの…。泉が私に触れることが、こわい。私がこんなだから…泉を待たせつけやつ…」

「え、でも。羽犬塚は泉に抱きついでんじやん

「違うの…。何で言えぱいいのか、分かんない。言いたくないの。怖いから、聞いたらきっと…軽蔑されるから、同情されちゃうから。そんなの、友達にしてほしくないから。言えないの」

感情のコントロールが効かなくなつてきているのだろう。
涙はポロポロとあふれて、乾いた農道の地面に染み込んでいく。
話せるはずもない。

こんなこと、友達に話せることじやないんだ。

「Hリー……ん、わかった。じゃあ、聞かないわ。昌樹もそれでいいわよね？」

「嫌がつてんのに聞くかよ」

笑いながら一人は頷きあつた。

「Hリー、いいこと教えてあげよつか？」

「……え？」

「私ね、実は山中のこと、好きだったのよ。Hリーよりも前から」

驚かされた。

最初は嘘かと思つたけれど、Hリーにそのことを告げて僕のことを見つめたその瞳には、全くの嘘はなかつた。

「私、不器用なのよね。私も、あんたみたいなはつきりと言えるような性格だったら良かつたんだけど。グズグズしてゐる間に、Hリーに先越されたわ」

「それのどこがいいことなの？ 泉はあげないよ」

いや、僕はものではないのだけれど。

「いいことなのよ？ ライバルつてこと。あんたは確かに山中と付き合つてるけど、私は諦めるなんて言つてないもの。私は昌樹みたいにものわかりのいい女じゃないわ。欲しいものは手に入れないと思が済まない。私に取られたくなかったら、早いとこ手くらう握れるようにはなりなさい」

意地の悪そうな笑みをエリーに向けて、こういい放った。

「やつらのことだから、よろしくね、山中。……せつかくだし、泉でいいからっ。」

この人、恐らくはエリーへの不器用な後押しをしているのだろうけれど、楽しげにこるよう、不機嫌そうに頬を膨らませるエリーを横目に、満面の笑みで僕に笑いかけていた。

そして最後に

「絵本の世界がうまくいくことだけだと思わないことね。世界には、イレギュラーな要素だってあるのよ。例えば、私みたいな嫌な女とかね」

まるで悪女のような物言いで、空気をかき混ぜる。でも、浮かべた笑みは次第に優しくなり、エリーのそばへよって、僕から引き離すと抱き締める。

「でも…私はエリーも好きなの。大切な友達。だから手は抜かないわ。応援してるわよ、エリー。私にとられたくないんでしょ？」

「小春…。うん。でも、絶対にあげないからね。でも、私たち、友達だもんね」

お互いの友情を確かめ合つように、抱き締めあつた。

この光景は、嘘の世界にあるものとしては、綺麗すぎる。これが、本物の光景なのか。

それとも、単純に僕が変わってしまったのか…。

それは、わからないけれど。

でも確かに、あの二人はお互いのことをそろそろ理解したのだ。

それは嘘でもなんでもいい、ただそこで、田の前で起つたことはず、偽物でも、真実なのだから。

「でも、友達同士で好きな人が同じなんてね。あーあ、エリーが羨ましい。隣だもんね、家」

「いいでしょ。毎日一緒にいるんだよ」

用事でもない限りはね。

といつよりも、誘わなくたつて屋根を伝つて部屋まで来るじゃないか。

「おいおい、小春は結構諦め悪いのな」

「うーん、喜んでいいのか、微妙なところだね……」

「あら、私じやご不満？たしかにエリーみたいに細くないけど、胸はあるわよ？」

と、強調するように胸を張つた。

浴衣に包まれてもなお、その大きさは誤魔化されることなく、その存在感を強調していた。

「泉……頑張れよ」

「助けてよ。君のお姉さんでしょ」

「えい」

勢いのない掛け声と共に、エリーは手を繋いできた。

頬は不機嫌全開に膨らんでいて田尻には涙がたまっていた。

そして、やはり恐怖に耐えているのか、手は震えているけれど、僕は敢えて離さないように、きゅっと力を込めて、彼女の手を握った。

「あらあらお熱いわね。でもまあ、私は諦めないから、ようじくさん」

そう言って神社の方へと歩きだした。

余裕綽々といった雰囲気を纏ながら、エリーの恋敵である親友は、エールと共にライバル宣言をして、僕たちを先導していった。

秋の騒がし

「もー！小春、泉から離れてよ！」

「いいじゃない。普段は独占してんだから、少しは融通利かせてよね」

自宅内、自室。

小春さんは僕の右腕に抱きつき、エリーは左腕に抱きついていて、僕はさながらサンドイッチのようだ。

こんな光景をクラスメイトが見れば、それこそ嫉妬と羨望の的なのだろうけれど、あいにくのこと、僕にはこの状況を喜べるような気概は持ち合わせてはいなかつた。

心春さんはあれから有言実行とばかりに僕への積極的なアピールを開始してきており、エリーもそれに負けじと頑張った成果が出たのか、エリーは手を繋いだり、キスをしたりなどに恐怖を感じなくなつていた。

でも、僕の手が手や顔以外に触れると泣き出したりするので、やはりまだまだ時間はかかりそうではあるけれど、これはきっと小春さんが発破をかけたことが一番の要因なのだろう。

「小春さん、本当に勘弁してよ……」

彼女の純粋な好意には素直に嬉しさを感じるところだけれど、僕にはエリーがいるし、エリー以外の女の子は僕としては考えられないのだ。

僕にだって、エリー以外には言えない過去があるのだから。

「あら、私は楽しいのに。昌樹、やめた方がいいのかしら？」

「やめてやれよ。そんなど嫌われても知らねえからな」

「あら、それは嫌ね。さすがに好きな人の恋人がライバルじゃ、分が悪いわね」

涼しげな表情でそんなことを言つけれど、僕から体を離すとき、すごく残念そうに感じたのは、氣のせいなのだろうか。

「…………泉は、私の。それに、抱きつくるのだって……小春じやなかつたら、絶対に許さないもん。小春だから許してあげたんだから」

「あら、ありがと。でもまあ、私は私のペースだし、エリーの要望すべてに答えられる訳じゃないから、そこんところは氣を付けなさい」

そうなのだ。

この人の言う通り、小春さんはとてもマイペースな人で、僕とエリーは普段、学食なのだけれど、一学期に突入してからは気分次第で手作りのお弁当を一人ぶん、三人ぶん用意してきたりする人なのだ。二人ぶんは僕と小春さんのぶんだけど、時々僕とエリーのために作つてきたりと訳がわからない。

三人ぶんは無論のこと、僕たち三人のぶんだ。

エリーもすごく料理上手だけれど、小春さんもかなりの腕前で、こと和食に関してなら隠し包丁などの知識もあり、エリーよりも上手かもしけれない。

「私は私なりの恋愛観があるのよ。恋愛は楽しくなきゃね」

僕のそばから離れると、座っていたベッドから腰をあげて本棚へと移動して、辞書の並ぶスペースを見やつていた。

まずい、そこは思春期の聖書を保管している場所であり、見つかれば弄られることが間違いないしだ。

僕の表情を見た昌樹はなにかを悟ったかのよつた表情をしており、目線で僕に同情してくれていた。

我が同志よ、君もそこに隠していたのか…！

などと、悠長に考えている暇はなく、小春さんは迷うことなく思春期の聖書を隠している場所に手を伸ばして、それを引き抜いた。

「あー、泉つてば。まだそれ持つてたの？小春ー、泉つてば酷いんだよ。巨乳ものは捨ててつていつたのに」

「あー、泉つてば。まだそれ持つてたの？小春ー、泉つてば酷いんだよ。巨乳ものは捨てるといつたのに」

論点そこー…？

普通は怒るといひじゃないだろ？

エリーだつてその手の本を見たときほめやけやせめもち妬いていたのに。

「どれどれ。……あら、本当。泉、ダメじゃない、エリーは胸のこと悩んでるんだから、『リカシーにかけることじけや。せめて貧乳ものにしなさい』

おかしい。

従姉さんに見つかったなら、ここで未成年がこの手の本を所有していることを叱るのだけれど、どうしてエリーたちはジャンルのことで怒つているのだろう。

それも、かなり真剣に。

「それから、たぶん…ベッドとマットの隙間でしょ、本棚の裏、カーペットの下でしょ、鍵のかかった引き出し。そう言つといろにもあるんじゃないから?……ねえ、昌樹? あんたの部屋を掃除したとき、減つてたのよね。捨ててないなら、どこへいったのかしら?」

「えー? あー…いや…」

昌樹は目を泳がせるが、それは仕方のことなのだ。
思春期の、それも高校生の男子はその手の本には興味はあれど、購入できなかつたり、買う勇気がなかつたりするものだから、友人づてに貸し借りが行われたりする。

そして、昌樹の本の一冊は、僕の部屋のなかにあるのだ。
それも、小春さんがいつたように、ベッドとマットの隙間にだ。
「あはははーあー、やっぱり男の子が困つてゐるのを見るのは、楽しいわね」

「小春つて…何気にどうだよね」

「そうね。でも、好きな人には…ねえ?」

「そんな目でアピールされても、今しがた僕は晒し首にされたも当然なんだけと……」

どうして僕はこんな人に好かれてしまつたのだろうか。
とこうより、どうしてこの二人はこんなにも恥のポイントがずれて

いるのだろうか。

エリーは髪をさわれば恥ずかしがるし、小春さんも同様だ。二人とも髪を触られる」とに対しては耐性がないのだ。

エリーは理由があつて恥じらいが歪んだのだけれど、小春さんは昔かららしかった。

「私が好きな人に好きにされたいのは本当よ? ただ、私は泉の彼女じゃないもの。なら、弄つて遊びたくなるのは当然

ビリやら価値観もいくらか他とずれていくようだ。

「つーか、小春が泉に構つて貰つのごビリじつオレまで来なくちゃならないんだよ?」

「男女の比率が悪くなるし、私の監視役」

「監視役?」

「そ、監視役。エリーは性に関してすぐ怖がつてるので、私はむしろ開放的なのよ。いつ私がバカな真似でかすか、ないでもないじゃない?だから、その予防」

「思いつきり私と反対なんだね、小春は」

「やうなのよ。だから、私とあんたを足して二で割つたら、ちょうどいいんじゃないかしら?」

そうかもしれないけれど、やはり僕はそんな急いたことは遠慮願いたいから、畠樹の監視役はありがたかった。

それに、僕はエリーと一緒に歩いていくと決めたのだから、彼女の成長を見届けたい。

成長を描いた、絵本のようだ。

嘘だらけのなかでも、ノンフィクションを描きたいから、彼女の手を握りしめたのだ。

「でもまあ私は結構、束縛するし、お勧め出来ない女だけだね」

ならなんでアピールしてるのさ。

という突っ込みは、彼女の真剣な想いを否定することになりかねないから、飲み込むことにした。

「安心しなさい。私は引き際は弁えてるつもりだから」

なら初めから弁えててよ。

という突っ込みも控えるべきなのだろうか。

どうにもこの人は飄々としてつかみどころがない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7514y/>

嘘つき世界と二人と絵本

2011年11月23日21時45分発行